

2 月泉の会 直子先生のお話

善隣幼稚園で育まれる『非認知能力』と『認知能力』

9～11 月泉の会で、『直接体験』と『間接体験』について考えてきました。今回は『直接体験』がにつながる『非認知能力』と、やはり大切な『認知能力』について、考えていきましょう。

『認知能力』とは、点数や数字で表せられる能力のことなので、比較的分かりやすい能力です。その反面、点数では表せられない能力のことを『非認知能力』と言います。『非認知能力』とは、例えば、目標を決めて取り組む力、意欲、新しい発想力、円滑なコミュニケーション力、やり抜く力、自己肯定感、集中力、やる気、忍耐力、自制心、理性、精神力、客観的思考力、判断力、行動力、リーダーシップ、協調性、思いやり、応用力、対応力、楽観性、失敗から学ぶ力、創造力、工夫する力…言葉にしてみると、沢山の意味が含まれています。『非認知能力』は、『認知能力』とは違い、いくつになっても伸ばせる力ですが、この幼児期に最も成長する能力だと言われています。『非認知能力』が育つプロセスで、「どうやって力を身につけるか」は一人ひとり異なります。その力が付いた結果よりもプロセスが大事なので、プロセスを見逃さぬように過ごしています。

「どうして幼児期に『非認知能力』が伸びるのか？」を疑問に答えを見出せそうな一文を、新聞より紹介します。

折々のことば 鷲田清一

氷河のクレヴァスを平然と飛び越える離れわざみたいなことを絶えずやっていて 茨城のり子

詩を書くことはそういうことで、だから「下手をすると水たまりを跨いだぐらいのことで天馬空に行くがごとき気分」になると、詩人は言う。一方、散文では一つ言うにも絡みつく文脈が多く、一行ごとに葛藤も増し、叙述のツボが押さえにくい。とくに口語文の場合、「原型なしで服をつくる」もしくは「磁石盤なしで道行く」ようなものだ。

随想集『一本の茎の上に』から。

「詩を書くことは」という箇所を、「こどもとはそういうもので」と置き換えて読み進めると、より心に響きます。また「一方」の箇所を、「一方大人は」と付け加え、「一つ言うにも絡みつく文脈」から、大人の不自由さと自由な子どもの比較が大きな違いではないかと感じました。こどもは自由であればあるだけ、自分の好奇心からどんどん夢が広がっていきます。「絡みつく文脈」とは、大人が決めるきまりやルールのことだと読み取ると、自由な時期のこどもに、大人がルールやきまりを教えたところで、こどもにとっては理解できず、絡みつく混乱を招くだけになる時期がある、ということ気を付けなければなりません。混乱を招くよりも、自分のやりたいことを尊重し大事にしてあげたいと思います。

『非認知能力』も大切ですが、もちろん『認知能力』も大切です。ただ数字で表せられるのでわかりやすい反面、周りを真似て行っていることもあるので、理解したかどうかを数字だけで図るのは、注意が必要です。『認知能力』を高めるためには、『非認知能力』と並行して、あるいはその中で育つことが一番望ましいと思います。

園生活の中で、『非認知能力』と『認知能力』共に伸びたなど感じたことの一例をお話したいと思います。

- ① ページェントは、好きや憧れという意欲や好奇心から始まります。
- ② 遊びの一環として、ページェントごっこをします。タイミングや回数は一番集中できる時を考えて提供します。また遊びなので、こどもたちは主体的に集中しやる気に満ち溢れています。
- ③ 目標を決めます。役柄や楽器の種類や曲目を選びます。論理的思考をする子もありますが、話し合いの中で決めるので、コミュニケーション能力も必要になります。なりたい目標を目指すため、セリフの声の大きさや表現の仕方を創意工夫し、お互いに褒め自己肯定感を高め合います。その間にセリフを覚えるといった認知能力が高められます。
- ④ 本番に向けて仕上げます。みんなで仕上げるという目標に向かって協調性や楽しさ、思いやりが育ちます。
- ⑤ 今年度は本番後も楽しいページェントごっこが続きました。お互いに“できた！”という気持ちから、自己肯定感を高め、自己認識と仲間意識も高まり、それが3学期の大きな成長に繋がっています。

このように生活の中で、『非認知能力』と『認知能力』は相まって成長に繋がっていきます。また、『認知能力』として人生を通して大切な『遂行力』を伸ばすには、『自由』であることが必要です。安全の確保をした上で、自分で選び、自分から取り組むことができるための『時間、空間、仲間』が保障されていることです。わたしたちは、きっかけや『自由』を保障するだけで、そこで何を学ぶのかはこども自身が選び、この力は小学校移行の学習のちからにも繋がります。

こどもたちの成長する力をゆったり見守り、共感して楽しみましょう！